

七月十八日
陸軍省
陸軍大臣
板垣征四郎
昭和十三年六月二十三日

第八號

近戰研發第九號

近接戰鬪兵器研究委員會ニ關スル件報告

昭和十三年六月二十三日

近接戰鬪兵器研究委員會委員長久村

陸軍大臣 板垣征四郎 殿

首題ノ件別紙（第一回報告）ノ通報告ス

陸軍省
密受第九二四號

昭和十三年六月二十四日
陸軍省
前子外
官

陸軍省
13.6.24
206
軍事課

陸軍省
13.6.29
第152號
銃砲課

陸軍省
13.7.6
第73號
機械課

陸軍省
13.6.29
118
整備課

陸軍省
13.6.28
受
兵務課

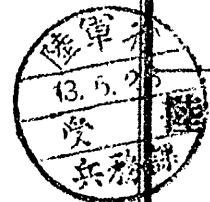
陸軍省
13.6.23
受
兵務課

近接戰鬪兵器研究委員會委員長久村
印

6060

極秘

近接戦闘兵器研究委員會第一回報告



軍

1209

0160



昭和十三年四月東京助川館

昭和十三年四月東京助川館

目次

- 第一、緒言
- 第二、委員着任ノ狀況
- 第三、第一回委員會經過
- 第四、第二回委員會經過
- 第五、兵器試驗參訓經過
- 第六、結言

1. 19

第一 緒言

本委員會委員ハ近接戰鬪兵器研究方針ノ立案竝試験ニ參劃ノ目的ヲ以テ三月三十一日附命課セラレ歴戰將校委員モ六月二日ヲ以テ全部著任シ且本日迄ニ二回ノ委員會ヲ開催シ略研究方針ノ立案ヲ終リ、且數次ノ試験ニモ參劃セルヲ以テ茲ニ中間報告トシテ第一回報告ヲ提出ス

委員官氏名別紙第一ノ如シ

第二 委員著任ノ狀況

歴戰將校委員ノ著任ハ勤務ノ關係ニ依リ差異アリシモ七名中六名ハ四月中旬ヨリ五月上旬ニ亘リ他ノ一名ハ六月二日著任セリ

第三 第一回委員會經過

四月十五日第一回委員會ヲ開催シ委員長訓示（別紙第二）ノ後別紙第三ノ如ク假決議セリ

第四 第二回委員會經過

六月二日第二回委員會ヲ開催シ委員會規定、近接戦闘兵器ノ定義、同研究方針等ヲ審議シ次ノ如ク決定セリ

1、委員會規定（同業務遂行要領ヲ含ム）別紙第四ノ如シ

2、近接戦闘兵器ノ定義 別紙第五ノ如シ

3、同 研究方針 別紙第六ノ如シ

第五 兵器試験參劃經過

五月八日以降各種兵器ノ試験ニ參劃シ左記結論ヲ得タリ

1、五月八日 八柱演習場

イ、試製爆藥投擲機

重量約六匁、方形黃色藥約三匁ヲ投擲曳火破裂セシムルモノニシテ命中精度良好ナラサルモ其ノ強力ナル爆破威力ニ依リ敵ノ心膽ヲ奪ヒ以テ側防機能肉迫攻撃等ノ動機ヲ作爲スルニ適ス

ロ、試製破壊筒挿入機

約二〇〇米ノ距離ヨリ九二式爆破管ヲ挿入シ二帶ノ鐵條網ヲ同

時ニ破壊セントスルモノナリ

構成繁雜ニシテ敵ノ對抗手段容易ナルモ奇襲兵器トシテ價值アリ

ハ、試製發射發煙筒

擲彈筒ヲ要セス發煙筒自身ニテ發射シ得射程約一〇〇米ナリ
機構操用簡易ニシテ歩工兵部隊用トシテ大量整備スルヲ可ナリ
ト認ム

ニ、十年式擲彈筒 用試製發煙筒 簡易發煙彈

製造簡易ニシテ十年式擲彈筒ヲ以テ約一五〇米、八九式重擲彈筒ヲ以テ約二〇〇米ノ距離ニ發射シ有效ニ使用シ得ヘク速ニ大量整備スルヲ可トスルモノト認ム

ホ、てなか彈

火焰劑ヲ填實セル手投彈ナルモ火焰分散ニ過キ威力微弱ナルヲ

以テ更ニ研究ノ餘地アルモノト認ム

8、六月五日 八柱演習場

輕（重）水平穿孔機

爆藥ヲ裝填セル鋼管ヲ油壓ヲ以テ土地ニ壓入シ其ノ爆破威力ヲ以テ側防機能ノ制壓壕ノ迅速掘開又ハ鐵條網ノ破壊ヲ行ハントセルモノニシテ壓入距離重ハ約一〇〇米、輕ハ約五〇米ナリ
輕ハ特ニ方向及深度ノ精度十分ナラス重ハ側防機能破壊ノ爲研究ヲ促進スルヲ要ス

3、六月六、七日 伊良湖射場

イ、試製重擲彈筒

重量四匁九〇〇、口徑五糎ニシテ彈量約八〇〇瓦ノ有翼彈ヲ投擲スルモノニシテ機構簡單堅牢遠近共ニ射擊範圍増大セルヲ以テ現制重擲ノ不利ヲ補フ優秀ナル兵器ト認ム
ロ、小迫撃砲

口徑八一耗彈藥ハ試製九七式歩兵砲ト同一、最大射程約四〇〇米、重量約二十珔ニシテ目標小、最前線ニ進出シ偉大ナル曲射威力ヲ發揚シ得ルノミナラス平射可能ナルヲ以テ最前線火器トシテ有力ナル兵器ナリ

4、六月九日 富津射場

イ、九六式輕機關銃

優秀ナル輕機ニシテ特ニ眼鏡ヲ裝著セルモノハ照準極メテ容易ナリ

ロ、九七式自動砲

口徑二〇耗、重量約四五珔ニシテ徹甲彈ニ依ル射撃ハ射距離約五〇〇米ニ於テ裝甲十三耗ノ鋼板ヲ有スル押收戰車ヲ貫通シ榴彈ニ依ル射撃ハ射距離約三〇〇米ニ於テ銃眼ニ對シ命中精度極メテ良好相當ノ威力アリ從テ本火砲ハ對戰車砲ノミナラス對銃眼射撃用トシテ優秀ナル兵器ト認ム

ハ、七、七耗小銃

反撞大ナルヲ以テ減裝藥其ノ他機構ノ改善ニ依リ之レヲ緩和ス
ルヲ要ス

ニ、狙撃眼鏡附小銃

視エ難キ目標ニ對スル狙撃ニ有效ナリ

ホ、自動小銃

更ニ命中精度ヲ良好ナラシメ得ハ狙撃銃トシテ適當ナリ

ヘ、機關短銃

突入時及陣内戰等ニ於ケル至近距離制壓兵器トシテ有效ナリ、
又自衛用兵器トシテ適當ナルモノト認ム

5、六月十日 歩兵學校

イ、各種手榴彈

九七式手榴彈及柄附手榴彈ニハ發火裝置ニ依ル精神躲避、形狀
ニ基ク投擲、携行ノ難易、保存ノ良否等ニ各利害アルモ兩者共

ニ取敢ヘス大量整備スルコトトシ爾後ノ爲ニハ兩者ノ長所ノミ
ヲ有スル手榴彈ヲ研究スルヲ要ス

尙攻撃用手榴彈ハ重量約三〇〇瓦以内ヲ適當トス

第六 結 言

之ヲ要スルニ本委員會ニ於テハ事變ノ經驗ト將來戰ノ特質トヲ顧慮
シ敵火特ニ其ノ機關銃火力ヲ壓倒スルノ必要ヲ益々重視シ編制裝備
並戰法ト相俟チ之ニ適應スル如ク近接戰鬪兵器ノ研究ニ努力シツ
アリ

8160

別紙第一

近接戦團兵器研究委員會委員連名簿

委員兼幹事										委員兼幹事長	委員長	委員名
工兵少佐	歩兵中佐	工兵大佐	砲兵大佐	工兵大佐	砲兵大佐	歩兵大佐	工兵大佐	砲兵大佐	歩兵大佐	少將	中將	官
村上義雄	道下義行	小野行守	武田信男	河野健雄	信氏良吉	吉川喜芳	立花章一	小池國英	鯉登行一	小須田勝造	久村種樹	氏名

陸軍

6160

委員兼幹事													
委員													
砲兵少佐	歩兵大尉	歩兵大尉	砲兵大尉	工兵大尉	工兵大尉	歩兵中佐	歩兵中佐	歩兵中佐	歩兵中佐	歩兵中佐	歩兵中佐	工兵中佐	歩兵中佐
加藤國治	吉本重章	由良四方吉	金森義雄	鈴木正春	加藤伶三	黒瀬平一	宮野正年	重信吉固	伊藤藤鈴嗣	眞田穰一郎	岡田元治	兒玉久藏	中山源夫
重永潔													

昭和十三・四 東京 陸軍省

0920

委 員				
工兵少佐	歩兵少佐	歩兵少佐	歩兵少佐	砲兵少佐
石川 清一	若松 七郎	小林 修治郎	武居 清太郎	江島 義行

陸
軍

近接戦闘兵器研究委員會委員ニ與フル訓示

戦闘ノ最後ヲ決スヘキ近接戦闘兵器ハ今次事變ノ經驗ニヨリ一層其ノ重要喫緊性ヲ痛感シ茲ニ特ニ本委員會ヲ設置セラレ之カ研究方針ノ立案竝ニ其ノ試験研究ニ参画セシメラルコトナリ本職乏シキヲ以テ委員長ノ重責ヲ汚ス幸ニ委員各位ノ積極的輔佐ト協力トニ信頼シ粉骨碎身此ノ負托ニ負カサランコトヲ期ス

委員諸官亦和衷協同最善ヲ盡シテ此ノ重大任務ノ達成ニ精進センコトヲ望ム

茲ニ本委員會ノ業務開始ニ當リ特ニ本職ニ與ヘラレタル陸軍大臣訓令ノ意ヲ体シニ、三要望スル所ヲ開示シ諸官執務ノ指針タラシメン
トス

一 本委員會ハ近接戰團兵器ノ特殊性ニ鑑ミ運用ト技術トノ一体不可分ノ要件ヲ充足スル爲各方面特ニ實戰ノ體驗者ヲモ網羅セラレアルヲ以テ運用特ニ實戰ノ經驗ヲ緯トシ最新ノ技術ヲ經トシ克ク此ノ種戰團緊切ノ要求ニ適應スル優良兵器ノ創造ニ努力スルヲ要ス

之カ爲各兵實施學校ト緊密ニ連繫スルハ勿論尙豫想スル將來ノ時局ニ對應シ其ノ戰團ノ特質ヲモ併セ考慮スルヲ要ス

而シテ實戰ノ經驗ハ今後ノ研究ニ對シ最モ根據アル指針ヲ與フルモノナルヲ以テ先ツ歷戰者ノ各種體驗及所見ヲ蒐集整理シ本研究ニ對スル有力ナル資料トナスコト必要ナリ

ニ 本兵器ハ敵前至近ノ距離ニ於テ使用スルモノナルヲ以テ戰場ノ將兵ヲシテ常ニ必勝ノ信念ヲ得シムヘキ無故障ノ兵器タルヲ要ス

之カ爲設計、製造共ニ敍上ノ著意ニ透徹スルハ勿論實戰ノ經驗ニ基ク寧ロ苛酷トモ思ハルヘキ條件ノ下ニ必要且十分ナル試験ヲ實施シ戰場ニ於テ生起シ得ヘキ故障ニ對シ處理ノ完璧ヲ期スルヲ要ス

本兵器ハ戰闘慘烈ノ極所ニ於テ教育不十分ナル將兵ニモ使用シ得シムル爲其ノ操用簡單取扱容易ナルヲ要ス

之カ爲特ニ主用途ニ徹底シ副用途ノ爲生スル複雑化ト重量増加トハ極力之ヲ避クルノ要アリ

本兵器ハ自体ノ消耗衰損敵彈ニヨル毀損等ニヨリ補給率極メテ大ナルモノアルニ鑑ミ其ノ兵器素質ノ決定ニ當リテハ國內工業力、國產資源ノ狀況等ニ留意シ大量生産竝ニ整備ノ可能ニ著意スルヲ

要ス

本委員會ハ既制式兵器並ニ目下審査中ナル兵器ヲモ合セテ近接戰
闘兵器ノ一体系ヲ考究スルト共ニ之カ編制、裝備ニ關シテモ併セ
研究シ參考トシテ主務當局ニ意見ヲ具申スルノ用意ヲ望ム

本委員會ハ其ノ設置ノ趣旨ニ基キ積極的ニ研究試驗ニ邁進スルヲ
要スト雖モ關係各機關トハ密接有效ニ連繫協力シ徒ラニ其ノ權限
ニ關シ相剋ヲ來スカ如キコト無キ様注意ヲ望ム

近接戰闘兵器ノ研究ヲ促進シ速カニ之ヲ整備スルハ現下ノ急務ニ
シテ其ノ成否ハ國軍戦力ニ影響スル所甚大ナルヲ以テ委員會ハ萬
般ヲ竭シテ之カ研究ヲ促進シ直チニ其ノ成果ヲ現ニ實行中ノ莫大
ナル資材整備ニ反映セシメ以テ將來戰ニ備ヘテ遺憾ナカラシムル

ヲ要ス

之ヲ要スルニ現下國軍ノ最大要望タル近接戰鬪兵器ノ研究ハ最モ重要ニシテ且緊急ヲ要スルモノナルニ鑑ミ委員諸官ハ至公無私眞ニ渾然一体トナリ協心戮力各々貴重ナル經驗ト深遠ナル知能トヲ傾ケ此ノ重大使命ノ遂行ニ萬輻ノ努力ヲ拂ヒ國軍ノ期待ニ副ハンコトヲ切望ス

昭和十三年四月十五日

近接戰鬪兵器研究委員會委員長 久 村 種 樹

第一回委員會ニ於ケル假決議事項

1. 近接戦闘兵器トハ敵前概ネ二、三百米以内ニ於テ特ニ威力ヲ發揚スヘキ兵器ト假ニ定ム
 2. 近接戦闘兵器ノ意義ヲ前項ノ如ク定ムト雖モ本委員會ニ於テハ突撃兵器ニ重點ヲ置キテ研究ス
 3. 手榴彈ノ研究ヲ速ニ完成ス
- 九七式手榴彈ハ攻撃歩兵ヲシテ使用セシメ柄付手榴彈ハ防禦用又ハ後方部隊用トシテ使用セシムルヲ適當トストノ意見アルモ尙各種ノ狀況下ニ於テ徹底的試験ノ後決定スルヲ至當トスルヲ以テ速ニ所要數ヲ歩兵學校ニ實用試験ヲ委託シテ試験ノ上決定ス

尙手榴彈ノ重量ヲ如何ニスヘキヤニ關シ技術本部步兵學校
ニ於テ速ニ連繫研究ス

4 委員會ハ技術本部内ニ於ケル獨立機關トシテ對立セジムル
モノニアラスシテ從來ノ審查會議ノ如ク運用ス

5 急ヲ要スルモノアルヲ以テ幹事全員ノ着任ヲ待ツコトナク
業務ヲ進メ之ニ關係アル試験研究ニハ直ニ委員ヲ參劃セシ
ム

之カ爲委員會規定等ノ制定ニ拘泥スルコトナク事務上ノ問
題ト實際業務トハ併行シテ進ム

別紙第四其一

陸軍

近接戦闘兵器研究委員會規定

第一條 近接戦闘兵器研究委員會ハ之ヲ陸軍技術本部内ニ設置シ近接戦闘兵器ニ關スル研究方針ノ立案竝ニ其ノ試験研究ニ參劔セシメ其ノ研究ヲ促進ス

第二條 近接戦闘兵器研究會ノ編制左ノ如シ

委員	委員長	技術本部長	委員兼幹事	同	同	委員	同	同	同	同
	技術本部長	技術本部長	同	同	同	各兵實施學校職員	陸軍省課員	參謀本部々員	教育總監部課(部)員	同
	一名	一名	五名	二名	八名	若干	五名	二名	二名	二名

必要ニ應シ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 委員長ハ全般ノ研究業務ヲ統轄シ其ノ促進ノ責ニ任ス

第四條 幹事長ハ委員長ノ命ヲ受ケ會議ノ爲議案ニ關スル調査並ニ會議ノ開催及委員會議事録ノ作製等ニ任ス

第五條 幹事ハ幹事長ノ命ヲ受ケ其ノ業務ニ服ス

第六條 委員ハ委員長ノ指示ニ從ヒ其ノ業務ニ服ス

第七條 委員會ニ於テ議決シタル研究方針ハ要スレハ軍需審議會ニ附議シタル上陸軍技術本部ノ常務ニ移シ其ノ研究ヲ促進ス

第八條 委員ハ試験研究ニ參劄シ其ノ研究ヲ促進ス

委員會業務遂行要領

一 委員會ハ既ニ進捗シツツアル近接戰鬪兵器ノ試驗研究ニ參劄シ
之カ促進ヲ圖ル

二 委員兼幹事タル兵科將校ハ第一線部隊ノ經驗ヲ檢討シ速ニ研究
方針ノ立案ニ關スル意見ヲ幹事長ニ具申ス
各委員^亦右ニ準シ所要ノ意見ヲ提出スルモノトス

三 幹事長ハ隨時幹事會ヲ開催シ右意見ニ基ク研究ヲ遂ケ研究方針
ヲ立案シ之ヲ委員長ニ具申ス

四 委員長ハ委員會ヲ召集シ研究方針ヲ審議ス
而シテ研究方針ハ五月中ニ之カ立案ヲ終ルモノトス

其委員會ニ於テ採擇セラレタル研究方針ハ要スレハ軍需審議會ノ
議ニ附シタル後之ヲ技術本部ノ業務ニ移ス

六 研究方針確定後ニ於テハ委員會ハ之ニ基ク近接取調兵器ノ試験
研究ニ參劃シ之カ促進ヲ圖ル

近接戦闘兵器ノ定義

「近接戦闘兵器」トハ主トシテ攻撃ニ方リ最前線歩兵力敵前概ネ二三百米以内ニ近接シ砲火ノ直接支援十分ナラサルニ至リタル時期以後ノ縦深アル戦闘ニ於テ歩兵ノ突撃ヲ奏功セシムル爲ニ威力ヲ發揮スヘキ兵器タイプ

近接戦闘兵器研究方針

第一 研究方針

一、近接戦闘ニ於テ克ク敵火特ニ其ノ機關銃火力ヲ壓倒シ各種反撃企圖ヲ破碎シ且天然人爲ノ諸障礙ヲ排除シテ益々國軍獨特ノ決勝力ヲ發揮スルニ遺憾ナキ如ク威力ヲ完備セシムルヲ本旨トス

二、本研究ハ運動戰ニ於ケル堅固ナル陣地ニ對スル攻撃ヲ主トシ尙特種陣地ニ對スルモノヲ包含スルモノトス

第二 研究要領

當面ノ要求ニ應スル如ク應急的研究ヲ促進スルト共ニ關係各機關ノ研究スル編制裝備就中戰法ト相俟チ將來戰ノ爲根本的研究ノ促進ヲ圖ルモノトス

之カ爲本兵器ニ關シ次ノ如ク研究ス

一、取敢ヘス制式兵器及既ニ研究審査ヲ終レル兵器ニシテ速ニ第一線部隊ニ増加シ或ハ新ニ裝備スルヲ可トスルモノヲ選定ス

2 現用兵器中速ニ改善ヲ要スルモノヲ研究ス

3 各關係機關ニ於ケル根本的研究ト相俟テ既ニ研究中ノ兵器ヨリ所要ノモノヲ選定シ或ハ新ナル兵器ヲ創造シ之カ研究ヲ促進ス

第三 研究要綱

近接戦闘兵器ノ全般ニ亘リ研究中ニシテ近ク之ヲ完成スル豫定ナリ